International Cooperation Center for
Agricultural Education, Nagoya University

ICCAE news

No.20 2011.12.1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成23年12月1日発行　通巻20号（年2回発行）

発 行／名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225（受付）FAX 052-789-4222
http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

「農学国際協力」誌の発刊について

同誌はほぼすべての編集作業を終え、2011年度中に印刷と発送を終える予定です。巻頭言や原著論文総説、ケースレポートなどを含め12編の論文とその他の記事で構成される予定になっています。農学分野の国際協力というこれまでになかった分野での雑誌の刊行がこれからどのように展開するか、温かく見守っていただければ幸いに存じます。最後に編集委員や査読者の方々にはご多忙の中、時間を割いてご協力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。（前多敬一郎）

第12回オープンフォーラム
「途上国留学生教育の人造り・国造りへの貢献～アフガニスタンの復興に向けて～」開催

10月6日㈭、7日㈮の両日、名古屋大学野依記念学術交流館において、学内外から約60名の出席者のもと、第12回オープンフォーラムが開催されました。今回は、「途上国留学生教育の人造り・国造りへの貢献～アフガニスタンの復興に向けて～」と題し、開発途上国からの留学生に対する教育についての講演と議論が展開されるとともに、JICAのアフガニスタン「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト」の開始を念頭に、復興途上にある国に対する国際協力の一環としての留学生教育の意義と課題について議論がなされました。

1日目は、上智大学の北村友人准教授（名古屋大学客員教授）および同志社大学の中西久枝教授による基調講演と7つのケースレポートの発表により、途上国の高等教育と国際協力に係る現状と課題、アフガニスタン復興開発における人材育成の役割、アフガニスタン留学生への教育の事例、アフガニスタン農業・農村開発の現状と課題などが報告されました。人的・組織的・制度的な能力開発や多様な文化的アイデンティティを反映した教育が重要であること、能力強化は双方向的なものであり、一方的に教えるのではなく留学生の主体性を重視して我が国の学生に対する効果・影響も配慮すること、人づくりは時間がかかる営みであり長期的な視野での教育が必要になること、留学生を通じて日本の顔を世界に見せることができること、受け身の留学生受け入れではなく、アフガニスタンの復興開発支援を念頭にした積極的な参画が期待されていることなどが強調されました。

2日目は、JICA人間開発部の後藤光企画役による「アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト」の概要説明に始まり、パネルディスカッションでは、日本の留学生教育の特色と欧米諸国の留学生教育との違い、我が国大学にとっての途上国留学生教育の意義、留学生教育の効果を高めるための方策、アフガニスタン農業・農村開発に向けた留学生教育の役割と課題などについて活発な議論が行われました。

2日間のフォーラムを通して、我が国における留学生教育がどのような形で行われ、いかに途上国の「国造り」に貢献しているかが示されるとともに、今後の効果的な取り組みに向けて、教員個人の努力に頼るだけでなく大学組織としての取組みの促進やそのためにも大学間での情報共有や連携協力を進めることの必要性が認識されました。また、アフガニスタンの人造り・国造りは一朝一夕にできるものではなく、20年あるいはそれ以上というような長い目で大学・学術・学問を支える人材を育てていくことが肝要であるとの認識が共有されました。（伊藤圭介）

学部学生に対する国内外実地研修

名大農学部によるタイ・カンボジアでの海外実地研修のサポート

名古屋大学農学部生物資源科学科３年生・４年生を対象としたタイ・カンボジアにおける海外実地研修を、平成23年11月24日から12月４日に実施しました。４回目の実施となった今年度は、36名の学生（３年生24名、４年生12名）をＴＡ６名、農学部教員７名、農国センター教員３名、事務職員１名にて引率し、総勢53名という過去最大規模の研修となりました。タイではカセサート大学の学生との交流、農村の見学と農家での宿泊を通じた農村体験を、カンボジアでは王立農業大学の大学生とチームを組み、農村・農業・農家の実情や問題点を理解するための調査を実施しました。両国それぞれにおいて、学習内容と成果をパワーポイントにまとめて発表を行うなど、過密なスケジュールでしたが、参加学生が多くを学び、友人を作り、そして視野を広げる充実した研修になりました。ICCAEからは、山内・前多・伊藤の３名が、現地大学との協議や研修内容の向上に関するサポートをしています。（伊藤香純）

カンボジアの農村でのインタビュー調査の様子（写真撮影：名古屋大学生命農学研究科　修士課程　春田つばさ）

カセサート大学からの学部学生研修

さる2011年10月24日から11月２日の10日間、カセサート大学農学部、獣医学部、工学部、教育学部の４学部より、学部３年生から５年生までの15名を招いて、実地研修の受け入れを行いました。これはカセサート大学との学生交流の一環として、学生支援機構の援助を得て実施されたもので、本農学部の学部３年生、本センターの教職員と生命農学研究科の教職員が受け入れ側として参加しました。本研修は大学における基礎研究から出た成果が、試験場や農協を通して農家に普及し、愛知県における先端的な農業を作り出しているという流れを体験してもらうことで、農学研究の意味を考えさせるという趣旨の下に、農学部各研究室での実験実習、名大農場、農協や農家、試験場などの見学などを実施しました。２日目の愛知県農業総合試験場の見学と歓迎会には、濱口総長も参加しました。最終日には研修の成果に関する発表会と服部研究科長からの修了証書の授与の後、日タイ双方の学生が手作りの料理を披露し、参加者全員が舌鼓を打ち、研修を終えました。（前多敬一郎）

訪問先の附属農場で

外部資金によるプロジェクト推進（平成23年度採択案件）

科学研究費補助金「インドシナにおける伝統的農産物加工品の高付加価値化に関するビジネスモデルの構築」（2011年11月～2014年3月）

カンボジアにて販売を開始した伝統的な農産物加工品（米蒸留酒）

多くの開発途上国では、農村地域の貧困削減や農家の所得向上に対する効果的な手段として、加工品の生産をはじめとする農産物の高付加価値化が奨励されています。しかし現実には、高付加価値化と生産者の生計向上が実現された事例はわずかであり、開発途上国の社会経済状況における付加価値の創出方法や、生産者の生計向上を導くための課題を見いだすことが急務とされていますが、これらに焦点を当てた研究は殆ど行われていません。

本研究はカンボジアを主な事例として、これまでに科研費や文部科学省国際協力イニシアティブ事業によって実施してきた同国における農産物加工産業振興に関する研究成果や、現在実施しているJICA草の根技術協力事業による「伝統産業の復興による農産物加工技術振興プロジェクト」の成果を活用し、開発途上国における農産物加工品の高付加価値化による生産農家の生計向上を目指したビジネスモデルの構築を目指します。（伊藤香純）

JISNAS活動報告（2011年6月～11月）

第１回JICA-JISNASフォーラム「アフリカ稲作開発を担う人材育成と日本の協力について」開催

JICA-JISNASフォーラム

大学は国際協力をどう考えているのか、JICAは大学にどう協力してもらいたいのか、これまではともすればこんな思いのすれ違いがありました。しかし、2009年11月、大学側による農学知的支援ネットワーク（JISNAS）の設立によって両者の意見交換が可能となりました。2011年７月14日、第１回JICA-JISNASフォーラムが東京農業大学で開催され、アフリカの留学生、JICA職員、文科省およびJISNAS運営委員やメンバー大学の教員など約50名が一同に会し、今後の協力方策を探る意図の下、JICAが進めているアフリカ稲作振興支援活動の中での人材育成、それに対する大学側の協力の可能性などについて、肩の力を抜いてそれぞれの思いを話し合いました。その中で研究者、普及員、行政官等の人材育成が重要であること、時間はかかるができるところから始めていくべきという指摘が重く感じられました。　（浅沼修一）

JISNAS運営委員会・総会開催

第３回JISNAS運営委員会・総会が10月７日に開催され、グローバル人材育成に寄与する国際協力活動として、JICA青年海外協力隊事業と連携して大学院生（修士）を教育の一環としてアフリカ地域に派遣する事業の形成や、アフガニスタン留学生受入大学指導教員間のネットワーク形成などについて話し合われました。（伊藤圭介）

海外長期滞在研究者からの報告

ケニアでの稲作研究をおえて

ケニアでの研究生活を終え、10月末に日本に帰国しました。2009年11月に初めてケニアを訪れた際、ビクトリア湖の湖畔に並ぶ水田を見た時の感動は今でもよく覚えています。現地では赤道直下の大学として有名なマセノ大学にて「陸稲の耐旱性関連形質発現に影響する栽培環境要因」をテーマに、特に根系機能に着目して、圃場試験を行ってきました。その結果、品種の根系機能の発現が地点や施肥管理によって大きく異なり、それらが乾燥ストレス発現と関係することが明らかになりました。このことは適切な品種・栽培管理を通じた根系機能の調節により、特定の環境条件に特異的な耐旱性を付与できる可能性を意味し、近年の根系機能に関する遺伝的解析の急速な発展を考えれば、将来の耐旱性オーダーメイド育種につながる研究分野といえます。現地の試験環境は厳しく、猿・牛・モグラによる獣害や大学の電気代未払いによる停電など苦労の連続でした。なによりアジアとは異なる文化の中で、人間関係は私生活面でも精神的ストレスになった一方で、いつも私を励ましてくれたのも、ともに働くケニア人研究者の仲間でした。この場にて、かけがえのない仲間達に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。（浅井英利）

マセノ大学での収穫風景

ケニアの州境で暮らすナイロート系の人々の村で繰り広げられる民族間交流

ビクトリア湖岸の土壌荒廃が進む地域で、その原因となる土地利用の実態を明らかにする調査に着手して４年が経過しました。2009年３月、ビクトリア湖東岸のニャンザ州とリフトバレー州との境界に暮らす西ナイロート語群に属するルオ族の村に初めて長期滞在をするようになって間もないころ、夜10時から深夜２時ごろにかけてヒゥーイ！ヒゥーイ！と奇妙な音がするのに気がつきました。リフトバレー州側に住む南ナイロート語群のキプシギス族が牛を盗んでいくのです。奇妙な音は畜主がそれを近所に知らせ、警戒を促す合図でした。３、４月は週に一回程度であったウシ泥棒の訪問は５月に入るとほぼ毎日になり、けが人も出始めました。腹にすえかねたルオの人々がパトロール隊を結成し、夜、村の中を巡回し始めました。10日ほど後、ウシ泥棒集団の中の２人が捕まり、村の人々によって殺されました。写真はウシ泥棒が殺された翌朝、まだ興奮冷めやらぬ人々の様子です。手には弓や棍棒、大鉈が握られています。自給用の作物も満足に生産できない厳しい環境で生活するこの村の人々にとって、ウシは非常に貴重な財産であり、それを守るためには仕方のない行動だったのです。　（山根裕子）

牛泥棒を退治し意気揚々とするルオ族の人々

ケニア稲作地帯を巡って　水上優子　愛知県農業総合試験場　山間農業研究所　主任研究員

2011年11月20日から27日まで、ケニア中央部と西部の灌漑地帯の稲作調査の機会をいただきました。小雨季のためか天候に恵まれ、大学や試験場を訪問しつつ、水田地帯を回りいもち病菌の収集と病態調査を始めました。灌漑公社の指導により水田管理は想像より丁寧でしたが、耕起以外の作業はほとんど人力で賄われ、畔草を食べる牛や山羊の群れに、かつての日本の稲作が想われました。今回の調査地域ではいもち病の発生が少なく、菌の収集数は限られました。これは気候条件にもよりますが、普及品種の中でいもち病に強い品種の栽培が増え始めていることも一因でしょう。普及が広まり占有化すれば抵抗性の崩壊が起きる可能性も高くなります。習慣の違いもあり、日本の技術をそのまま用いることは困難かもしれませんが、抵抗性遺伝子の種類を増やす育種支援の重要さを感じました。ケニア灌漑地帯の生産性の豊かさを見、気さくな農家の人々に会って、想像と知識でしかなかったアフリカ農業を実感できたことに感謝いたします。

外国人客員研究員

カンボジアにおけるイネ主要病害虫の同定ならびにその防除技術開発に関する研究

ハイン・ティーダ

カンボジア王立農業大学作物栽培学部副学部長
外国人客員研究員（任期：2011年8月1日～9月30日）

カンボジアの主要農作物である米は、１ヘクタール当たりの平均収量が２～３トンと生産性が低く、農村部住民の貧困の一要因にもなっています。しかし、米の生産性に影響を与える病害虫に関する研究は殆ど行われていません。そこで、近年カンボジアの稲作に多大な被害を与えているといわれるトビイロウンカの実態とその影響について、ICCAEや生命農学研究科の教員や学生とともに共同研究を始めました。研究はまだ始まったばかりですが、トビイロウンカを採取・分析する方法を見いだし、カンボジアで実施する実験の計画と準備が整いました。滞在期間中、実験指導をしてくださった田中利治教授をはじめとする多くの生命農学研究科の先生方、またICCAEの教員の皆さまに感謝いたします。

略歴　1967年カンボジア生まれ。1992年カンボジア王立農業大学作物栽培学部を卒業し、1993年より同大学の実験助手を務めた後、1999年より現職。2004年同大学大学院農業科学専攻修士課程を修了。

オープンセミナー（2011年6月～2011年11月）

回　数	日　時	テーマ	講　師	所　属
2011年度 第３回	6月29日	開発コンサルティング業務とは ～開発途上国最前線からの報告～ 講演1：国際協力における開発コンサルタントの役割 講演2：ザンビア国「小規模灌漑」開発調査におけるコンサルタントの取り組み	講演1：高梨　寿 講演2：蛭田 英明	社団法人海外コンサルティング企業協会 専務理事 株式会社三祐コンサルタンツ 海外事業本部 技術第3部
第４回	9月５日	世界の食料問題と日本農業のポジション	生源寺眞一	名古屋大学大学院生命農学研究科教授
第５回	9月21日	講演1：ケニアにおけるイネいもち病対策：いもち病抵抗性品種の育成と生物防除に関する共同研究 講演2：カンボジアにおけるトビイロウンカの発生状況の把握と防除技術の開発に向けて	講演1：キャサリン・マチュンゴ 講演2：ハイン・ティーダ	国立灌漑公社アヘロ灌漑研究ステーション 研究・灌漑官（ケニア）/ ICCAE客員研究員 王立農業大学作物栽培学部　副学部長（カンボジア）/ ICCAE客員研究員
第６回	11月11日	アジア天水田における変動土壌水分ストレス条件下でのイネ生産に対する根の可塑性の機能的役割	ロエル・スラルタ	フィリピンイネ研究所　農学・土壌・植物生理学部門　科学研究専門官